

# 視覚障がい学生に対する合理的配慮の検討 第三報

—地域資源創成学部における教養教育科目（英語）—

福島三穂子（コミュニケーション研究室）  
市園なお子（宮崎大学 非常勤講師）

## 1. はじめに

本報告はシリーズ「視覚障がい学生に対する合理的配慮の検討」の第三報である。全盲の視覚障がい学生に対して地域資源創成学部として安定した教養教育を施すために教養教育科目担当教員である学部所属教員らが行った記録である。シリーズの概要については本誌の「視覚障がい学生に対する合理的配慮の検討 第一報」を参照してほしい。以下に記すのは、我々の試行錯誤の記録であり、英語科目に関わる合理的配慮とは何かを提言するものでは決していない。しかし、誰にとっても果てしないと感じる語学習得のプロセスを、視覚障がい学生への合理的配慮という視点からここで共有することで、何かの参考になれば幸いである。

## 2. カリキュラムにおける英語科目の位置づけ

本学部では、教養教育カリキュラム、および学部カリキュラムの中に英語が必修科目として、1年次前期に1科目（Rc1：コミュニケーション英語）および後期に1科目（Rc2：コミュニケーション英語）、2年次前期に1科目（ビジネス英語 I-1）、後期に1科目（ビジネス英語 I-2）が設定されていて、これらは学部とは別の部署である多言語多文化教育研究センターの教員が担当している。3年次になると、学部専門必修科目として、前期に1科目（ビジネス英語 II-1）、後期に1科目（ビジネス英語 II-2）があり、これらは学部が担当している。科目担当教員は3名おり、2名は英語専門のネイティブの非常勤講師で、1名は英語を専門としない学部専任教員（筆者ではない）が担当している。

本学部は、マネジメントの知識・能力を得る教育アプローチを重視することから、ビジネス英語の習得を一つの柱としていて、その客観的能力を測る基準としてTOEIC®テストを採用している。TOEIC®テストのスコアが全ての英語科目の成績に反映されることから、年2回（前期1回、後期1回）のTOEIC®テスト受験が必須となっている。

## 3. 英語科目教育関係組織

英語科目に関しての合理的配慮を検討する上で、難しさを作る要因となったのが、科目関係部署と人の多さである。それゆえ組織的な連携が取りにくく、責任の所在が明確でなかったことも関係した。本稿は、学部教員と補講担当の非常勤講師が報告しているが、学部教員は、たまたま英語教育に関わる人脈を持ち、また視覚障がい学生を受け入れるにあたって、本学部の英語カリキュラムにおける合理的配慮の提供に不安を持ったことから、教養教育をはじめとする関連部署との連携や補講の手配、筑波大学附属視覚特別支援学校での相談などを実施してきているという背景がある。

教員組織としては、教養教育科目担当教員（学部外の組織所属）、補講担当非常勤講師（市園）、その2名をつなぐ役目を果たし、非常勤講師をサポートする学部教員（福島）、TOEIC®テストの手続きを担当する学部教員、授業に入るTA（学部学生）が主な科目に関する直接的な関係者で、学部職員組織としては、教務学生支援係（参考書のデータ化やTAの総括など）、総務係（予算等の全学とのやりとり）、学内組織とし

では、障がい学生支援室（大学生生活全般のサポート、学習機材や教科書のデータ化や印刷に関わる別部署との連携）、大学附属図書館（教科書のテキスト化）、生協（教科書のデータ化、TOEIC®テストの手配など）、学外組織としては、都城点字図書館、宮崎県視覚障がい者センター（データ化したデータの印刷など）、IIBC（TOEIC®テスト受験関連）などがある。以上のように、関係者が多いので、学内者に関しては Teams でチームを作り、情報共有できたことは助けになった。

#### 4. 英語：学期開始前の準備

情報・データリテラシー、数学、英語に関係する教員は、2024年度の新学期が始まる直前の3月に新学期が始まる前に筑波大学附属視覚特別支援学校を訪問し、それらの科目の授業をする際の配慮や方法などについてアドバイスを頂く機会を作った。ここでは、情報・データリテラシーと同様、英語もスキル習得科目として、他の講義科目とは別カテゴリーの中にある科目と捉えるべきだということをご教示頂き、スキル習得科目という枠組みの中での準備が必要であることを再認識した。授業構成を考える上で、大変参考になる情報共有をして頂いた。

まず、英語に関しては、以下の説明にある通り、点字での英語表記は、「縮約」が主流でありアルファベット使用の英語表記とは全く別物であることがわかった（図1）。

「中学部では文字指導を効率的に行うため、生徒それぞれの使用文字に合わせ、A組（点字使用クラス）とB組（墨字使用クラス）に分けています。A組の1年次では、アルファベットや文章記号などの基本的なルールを学習します。この段階では、墨字のアルファベットと点字のアルファベットは1対1で対応しています。2年次からは、英語学習と並行し、統一英

語点字(UEB)という縮約を学習していきます。統一英語点字とは、かつては2級点字と呼ばれていましたが、1つの単語を1マスや2マスの点字に短く表したり、単語の全体や一部を縮めて表記することによって、英語の読み書きを早くすることができるものです。視覚障がい特別支援学校では、この統一英語点字を、2年・3年で使用する点字教科書の巻数に合わせ、7段階に分けて指導しています。よって、中学部を卒業する時には、統一英語点字をすべて学習し終えますので、高等部の点字教科書や英語圏で使われている英語の文章を読むためのルールを習得することになります」。https://www.nsfb.t.sukuba.ac.jp/eigo/eigo\_d.html からの抜粋

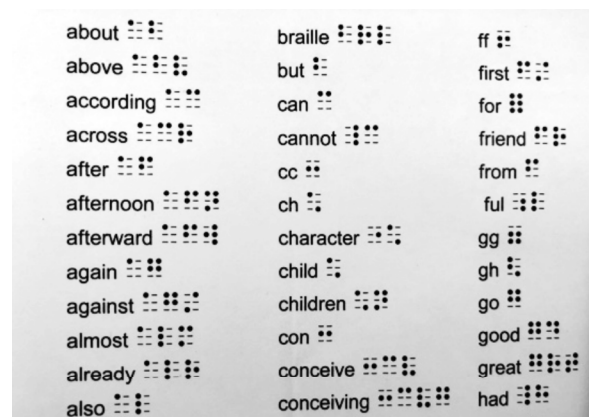


図1 縮約の例（筑波大学附属視覚特別支援学校提供の配布物を筆者が撮影）

視覚障がい学生には大学の英語科目の受講の大前提として、単語のスペルに関してこの「縮約」という点字の表記システムではなく、墨字のアルファベット表記を学んで貰う必要がある旨、上記配布物（図1）と共にご教示頂くまで、我々にはその知識が全くなかった。中学1年生の英語学習の初期の段階では、墨字のアルファベット表記とこの「縮約」というシステムによる点字の英語表記は1対1で対応していることから、ゼロベースのスタートにはならないが、縮約を使わないアルファベットでは

どう単語が書いてあったのかまず思い出して、そちらのシステムで学び直しをすることになる。筑波附属大学の先生方によれば、まずこの部分に時間がかかる可能性はあるが、将来的なことも考えると、これは学生が克服すべき課題であり、時間がかかっても、大学のカリキュラムの中で学んで貰わなければいけない内容の一つとして捉えることができ、言い換えれば、合理的配慮という枠組みの中で、排除できる課題とは捉えられないということだった。会議の場で、このポイントが確認できたことは有益だったが、同時に本学部のカリキュラムの時間軸の中で、どの様な履修計画を立てるべきなのか白紙に戻った感覚があった。2024年2月の顔合わせの時に、該当学生に“Hello World”とパソコンに打って貰ったが、キーボードのブラインドタッチには問題がなく、英検準2級を取得しているにも関わらず、相当の時間を要したことが思い出された。しきりに点字ならもっと早く打てると言っていた意味がようやく理解できた。1年次前期は、墨字アルファベット表記による単語の習得を集中的に行う必要があるかもしれないと考えた。

事前に学生本人から、英語には苦手意識を持っている旨聞いていたが、筑波附属大学の先生方の見解では、視覚障がい学生にとって点字（縮約）で教科書を読むことが英語科目の活動の中では一番慣れている部分であろうということで、既に英語の教科書については点字化を決めていたことは、安心材料になった。教科書に関しては、点字版を用意するため大枠としては問題がないが、練習問題（絵を見たり、穴埋めをしたりするものなど）や、文章を書かせる問題に関して英語担当教員の配慮が必要になることがわかった。

1年次で行う予定である具体的な授業活動<sup>1)</sup>について情報共有をする中で、毎回授業の冒頭にパソコン上で実施する単語テストの一環と

して行なっている、単語の並び替え問題は非常に困難なタスクであることもご教示頂いた。これは視覚障がい学生は、音声と記憶に頼るしかないので、どんな単語が選択肢にあるのか画面読み上げソフト(PC-Talker)に読ませ、その全てを記憶することでしか並べ替えに対応できないからだが、ご指摘頂くまで気が付かなかった。点字でメモが取れる携帯端末(ブレイルメモ)の活用も、32-40マスを1行とした内容しか書けないことから、授業中にメモを取る時を含め、有効性は未知数ということだった。また授業中は、基本的にペアワークやグループワークを中心に進めている教員が多いことから、進捗を見ながらティーチングアシスタント(TA)による支援強化が出来れば、円滑な授業につながるかもしれないということだった。

上記の気づきを踏まえ、学期が始まる前に、学部教員が収集した情報を1年次前期担当の教養教育英語担当教員と共有し合理的配慮について話し合う機会や、視覚障がい学生と直接話す機会を設けること、そして補講やTAの雇用を検討することや、3年次以降の教科書の検討をすることを認識した。TOEIC®テスト学習に関する教科書については、点字印刷が可能そのような公式問題集を最優先して<sup>2)</sup>、その問題集を教科書に指定する可能性も検討して貰う必要性を確認した<sup>3)</sup>。これらを踏まえた上での補講の様子は、本稿6章を参照されたい。

## 5. 英語 Rc1 授業の概要

該当学生が受講する英語 Rc1 授業は、英語のみで書かれた教科書“Live Escalate Summit Book 3”（角山ほか2022）とWebClassシステム（本学のLMS: Learning Management System）を使用し、晴眼者学生に合わせたスピードで進行される。教科書は点字印刷されたものが1章ごとに徐々に都城点字図書館から届いている。リスニング・スピーキング学習とリー

ディング・ライティング学習を隔週で学習する構成で、ペアやグループ単位での活動が頻繁に行われる。その他、毎回約 10 分間の小テストが WebClass 上で実施され、さらに担当教員が作成する PowerPoint を使って TOEIC®テスト対策が説明される。授業課題は 2 種類あり、両方ともパソコン上で行う。教科書の練習問題の解答を入力する WebClass 教材と、教科書と連動したオンライン教材『LINGUAPORTA』(成美堂)によるボキャブラリー学習課題である。

## 6. 補講の概要

補講には毎回学部教員が同席し、補講担当教員と補講の進捗を見ながら合理的配慮について随時意見交換できるような体制で始め、少なくとも前学期中は同体制を維持することとしている。補講は、英語 Rc1 の授業と同日午後を設定されており、晴眼者と同じスピードで進行する英語 Rc1 授業において追いつけなかった部分を補うことを目的としている。主に、授業テキストの内容指導、課題学習のサポート、TOEIC®テスト学習のサポート、そして学習プランの設定を行う。

しかし、この 4 点に焦点を絞ることができたのは前学期半ばを過ぎる第 8 週から第 9 週あたりである。開講当初はどのようなサポートをすればよいのか検討がつかず、ほとんど学習できていない授業課題を前に途方に暮れた。そこから学部担当教員と補講担当教員とで毎週毎週試行錯誤を繰り返し、ようやくこのかたちにたどり着くことができた。

該当学生は入学前に英検準 2 級を取得しているということであった。補講第 9 回までの学習の様子からはボキャブラリーと英文法の力は同学部 1 年生の平均レベルあるいは平均以上の基礎力があると推定している。懸念していた単語スペルの知識も、現在の学習において特に支障はない。リーディングスピードを把握するた

め、第 3 回補講において 1 分間に読む単語の数 (words per minute/WPM) を測定した。結果は 40 WPM で日本の大学生平均と言われる 80 ~100WPM よりも少ないが、これは使用した教科書が「縮約」点字表記ではなかったことが大きく影響していると考えられる。今後、墨字のアルファベット表記に慣れることにより読解スピードは向上するだろう。

## 6.1 英語 Rc1 授業内におけるサポート

補講担当教員および学部教員は、該当学生にどのようなサポートが必要なのか確認するため、授業活動が一巡する第 1 回から第 6 回まで英語 Rc1 の授業に入った。教室の入り口に近い一番前の席に該当学生と TA の学生の席が固定されている。補講担当教員はその後席に着き、学生が授業のどの部分についていくことができているかをモニターした。同時に、視覚障がい学生にとっては困難な活動の際に代替の活動を指示したり、サポートの仕方を TA に助言するなどした。

初回授業では、点字教科書、パソコン、ブレイルメモ、授業内容を録音するボイスレコーダー、画面読み上げを聞くためのイヤホンなど、複数の機器や教材を手探りで使い分けるのに手間がかかっている様子が確認された。1 つの作業に取りかかる頃にはクラスはもう次の授業活動に移っているようなペースである。授業後に本人に尋ねると、何が行われているのかほとんどわからなかったという言葉が返ってきた。焦りもあるように見受けられた。まずできることとして、ブレイルメモによる授業のメモ取りをやめて教員の話聞くことに集中するよう提案した。本人も、授業を振り返る場合はボイスレコーダーの記録を聞き直せばよいからと同意してくれた。翌週の授業でそれを実践したところ、理解できる部分が増えたとのことであった。

ある回は TA の学生が急な発熱により不在だったため補講担当教員が代理を務めた。現在では補講担当教員が同席していないため、配慮が必要な場面では、視覚障がい学生本人からクラスメートや授業担当教員に対し、意思表示をするよう繰り返し伝えている。

## 6.2 補講第 1 回～第 9 回の状況

第 1 回授業を通じ、教科書学習を済ませたうえで出席しなければ授業進行についていけないということが明らかになった。しかし、該当学生が単独で学習するための教材やパソコン環境がなかなか整わず、教員がサポートできる補講の時間をすべて教科書学習に費やさざるを得なかった。その他にも課題学習のサポートや TOEIC® テストのための指導も行わなければならないのだが、すべてをこなそうとしてすべてが中途半端になっていた。

ひと通りの学習支援機器が整ったのは、第 8 週あたりである。それまでの経緯を抜粋して以下に記す (表 1)。次々と現れる問題を何とか解決できているのは、毎回の補講の進行を見守っている学部教員の尽力に負うところが大きい。学生のニーズを察知すると、迅速に適切な相談先にコンタクトを取り翌週には対応をしている。

こうした試行錯誤を経て少しずつ学生が単独でできる活動の幅が広がり、補講学習の一部を自宅学習に託すことができるようになっていった。

## 6.3 オンライン教材について

オンライン学習教材の多くは、学習者が楽しく効果的に学習できるよう様々な視覚効果が工夫されている。ところが視覚障がいのある学習者にとっては、それが操作を困難にする原因

出所) 筆者作成

週	見つかった課題
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>点字教科書が届いておらず、パソコン支援ソフト (PC talker) も未設定である。</li> <li>オンライン教材『LINGUAPORTA』の操作が視覚障害者には操作困難と判断する (対応は後述)。</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>点字教科書および PC talker のインストールが完了する。しかし選択肢は読むが設問は読まれないなど読み上げに不具合があり、Net Reader の必要性が発覚する。</li> </ul>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>Net Reader の設定が完了する。</li> <li>PC talker の英語読み上げスピードが日本語に合わせて異常に速く、発音もカタカナ読みになっているため理解し難い。</li> </ul>
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>入学前までは Google 辞書を使用していたようだが、本格的な辞書の必要性が顕著になってきたため教員が点字辞書の存在とその購入方法を調べ始める。</li> </ul>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>PC talker の言語設定にメイン/サブがあることがわかり、英語読み上げをネイティブ発音に設定できるように変更できた。しかし、スピードは速いままである。</li> </ul>
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>PC talker の英語読み上げスピードが調整可能になる。</li> </ul>
7	<ul style="list-style-type: none"> <li>次の授業範囲の点字教科書が手元に届いていない。</li> <li>点字辞書の購入方法がわかり、本人に伝える。</li> </ul>
8	<ul style="list-style-type: none"> <li>点字辞書の体験版はインストールされたが、収録内容に限りがある。代金支払いが完了するまで正式版は入手できない。</li> </ul>
9	<ul style="list-style-type: none"> <li>腕時計がないので、TOEIC の解答の時間配分の指示ができない。</li> </ul>
10	<ul style="list-style-type: none"> <li>点字辞書の正式版がインストールされた。しかし、熟語の意味を調べる方法がわからない。スマホの Google 辞書を併用するしかなさそうである。</li> </ul>

になり得る。

英語 Rc1 の教科書と連動した Web 学習システム『LINGUAPORTA』も大量の学習項目を効率よく学ぶことができるよう工夫された教材なのだが、残念ながら該当学生にとっては操作が難しいと判断した。まず、解答画面を開くまでに最低でも 6 回の操作が必要である。マウスをクリックする青眼者と違い、PC-Talker の音声を頼りにすべてキー操作でカーソルを動かすため解答画面にたどり着くまでに非常に時間がかかる。解答画面は 1 問ごとに次ページに移るため、PC-Talker は画面上に表示されているすべての文字をその都度読み上げると予想される。該当学生は、PC-Talker の日本語の読み上げの設定速度を通常の 3~4 倍程度の速さにしているが、それでも時間がかかり過ぎる。加えて、画面上で単語をドラッグする並べ替え問題があり、これは明らかに操作ができない。

代替学習として、出版社が提供している教員向け問題作成機能を利用して補講担当教員が別途すべての問題をテキスト化し、WebClass で学習させることにした。これには授業担当教員の下承も得ている。該当学生は、WebClass であればいくつかの形式を除いてサポート無しで学習することができるため、教員の補講準備に時間はかかるが、この解決策は有効である。

WebClass で英語教材を作成する際に留意している点を、参考までに記しておく。

- 1) ログインしてから最短の操作で文書や問題画面が表示されるようにする。
- 2) 文書や音声のダウンロードやリンクへのジャンプなどは混乱しやすいのでできるだけ避ける。
- 3) PDF や PowerPoint で作成された文書は PC-Talker による読み上げがうまくいかな

いことがあるため、資料はテキスト形式で直接入力する。

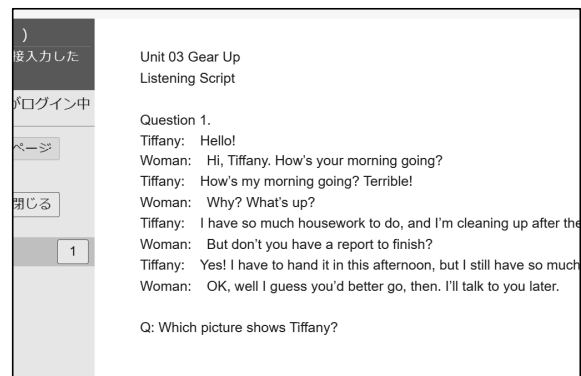


図 2 テキスト形式で直接入力した資料の例

- 4) 選択形式と短文入力形式の問題は、時間をかければサポート無しで解答できる。
- 5) 並べ替え形式や記述式の問題は、設問を読むことはできても解答の入力が困難なため、本人が Word に解答を入力し、それを補助者が WebClass に代理入力する。

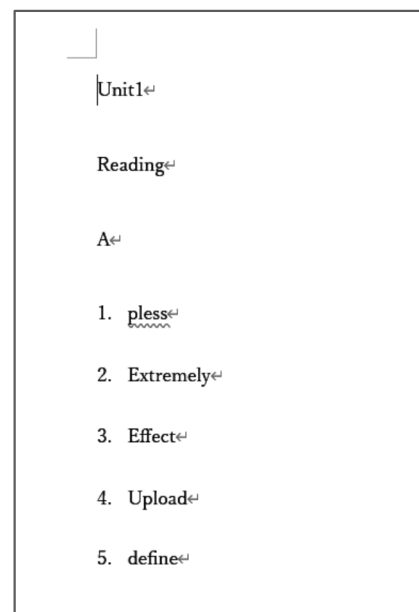


図 3 学生が Word に入力した解答の一部

- 6) 画面に埋め込まれたリスニング音声は、再生後にカーソルの動きが混乱して次に進めないことが多い。

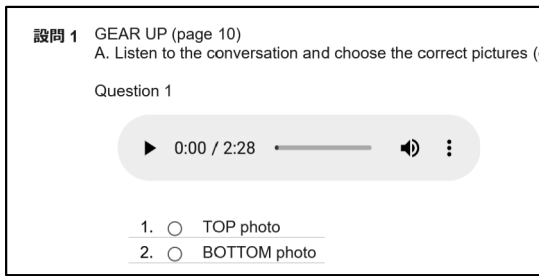


図 4 画面に埋め込まれた音声の例

対応として、音声ファイルとして学生のデスクトップに保存させ、それを聞いて WebClass 上の問題を読んで解答を入力/選択させる。デスクトップに保存された音声ファイルはサポート無しで開くことができる。

- 7) 空所補充問題の空所の下線は 1 つだけ入力する。体裁を整えるために下線を複数入力するとその回数分「下線、下線、…」という読み上げが繰り返されて聞き取り難い。

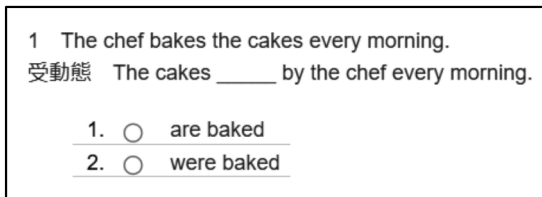


図 5 空欄の下線を複数入力した例

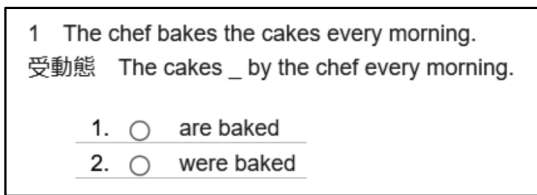


図 6 空欄の下線を 1 つだけ入力した例

- 8) 並べ替え問題の単語群は、スラッシュで区切ると「(単語) スラッシュ (単語) スラッシュ…」とうるさくなるため、スペースだけで区切るか、1 語句ずつ改行することで区別する。

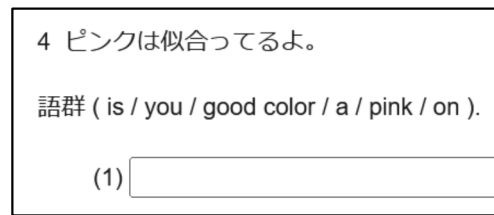


図 7 語群をスラッシュで区切った例

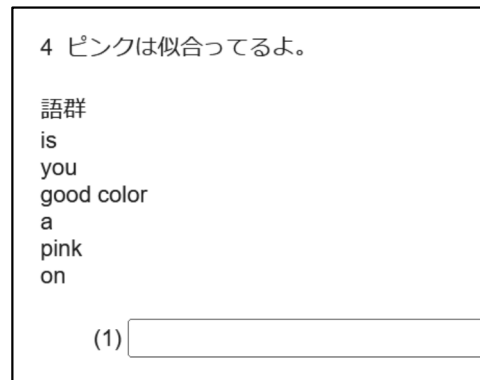


図 8 語群を改行によって区切った例

いずれも PC-Talker による読み上げを想像しながらできるだけ余計な情報を除いてみたもので、学生が操作する様子をモニターしたり、本人への聞き取りをしつつ修正を重ねている。つい最近気付いたばかりでまだ実行できていないのがリスニングスクリプトを提供する際の配慮である。晴眼者は、音声で文字で表されることにより新出単語をチェックしたり、音のつながりや脱落などを確認できる。しかし視覚障がいのある学習者の場合、Word 形式で提供されるスクリプトであっても読み上げソフトを通して再び音声で認識することになる。点字教科書に記載されていない音声スクリプトは、適宜、点字プリンターで点字版スクリプトを作成して提供することが望ましい。

## 7. TOEIC®テスト受験

6 月中旬には学部が指定する TOEIC®テストが実施された。ほとんどの新入生にとってこれが初めての TOEIC®テスト受験となるため、英

語 Rc1 授業では毎週 TOEIC®テストの概要説明と解答練習が行われていた。しかし、WebClass 上の PDF 資料を見ながら、講義室内のプロジェクターから投射される内容が説明されるため、TA がサポートしたとしても、該当学生が授業内容についていくことは困難であり、これも補講でカバーする必要があった。しかし、TOEIC®テスト対策に時間を取ることができたのは受験前の 2 回だけだった。しかも、障がいのある受験者向けテスト（プライオリティ受験）について本学生協や TOEIC®テスト担当教員を通じて、実施団体からの正式な具体的に欲しい情報（例えば、試験中 30 分ごとに時間を知らせて貰えるのか？）を入手できたのは受験の 1 週間前である。結果、試験 2 週間前の補講で一般向けのテスト構成の説明とサンプル問題練習を行い、受験前最終の補講でプライオリティ受験の概要を確認しただけで本番に臨むこととなった。

当日の試験は、本学の大教室を 2 つ使い、本学部の学生約 300 名（1 年生から 3 年生）が一斉に受験し、10 時開始の 12 時終了（リスニングとリーディング）というスケジュールで実施される。該当学生については、試験監督とサポート学生がいる別室において（図 9）、点字板を持ち込んでの実施で（図 10）、10:00 開始、10:51 リスニング終了（ここまでは晴眼者と同じ）、そのままリーディングを 1 時間、11:51 まで行い、20 分の軽食休憩を挟み、12:11 からリーディングを再開し 2 時間行い、14:11 に試験終了というスケジュールだった。その後、点字で書いた解答を該当学生が読み上げ、サポート学生がマークシートへ転記する作業があり、これに 30 分強かかり終了は 14:45 であった。

TOEIC®テスト受験に関する気づきは以下の

とおりである。1) まず問題冊子と点字版が余裕を持って置ける机の配置の必要性である。点字の問題冊子は分厚く両面印刷のため自由に手が動かせるスペースが必要なことに、今回はリスニングの試験が開始してから気づいたため、途中で机をもう一つ付けて対応した。2) リスニングに関しては、晴眼者と時間配分は同じであるため、特に解答選択肢が問題用紙に印刷されている場合、リスニング問題を聞きながら、問題用紙を触り解答選択肢を把握し、解答を選んだら、点字版に問題番号と解答を打っていくというマルチタスクをこなす必要がある。この点は、合理的配慮の中にあるのではないかと感じるので、問題と問題の間に数秒間を空けるなどの対応を実施団体へ提案したい。3) 時間の経過を知る術は監督者の声がけによるものだけだが、試験後に声がけのタイミングについて該当学生にヒアリングしたところ、30 分は長すぎて時間の経過が分かりにくいということで、次回からは 20 分ごとの声がけを依頼したい。



図 9：試験前の様子（筆者撮影）



図 10：点字板（筆者撮影）



## 8. 今後の補講内容

前学期も残り1ヶ月半となった。学生が単独でできる学習が増えてきたとはいえ、スタートの遅れのため先送りにしてきた学習課題をすべて完了させるには時間が足りない。ここからは成績評価に係わる課題を優先して取捨選択しながら、効率よく学習を進めなければならない。

後学期にはTOEIC®テストのためのボキャブラリーや受験テクニックの指導も行っていく。単語習得においては、おそらく晴眼者とは異なるメカニズムがあるものと推測する。また、スキミングやスキミングといった読解テクニックは有効ではないだろう。本人への聞き取りをもとに、適切な指導を検討していく必要がある。

## 9. おわりに

ここで記しておきたいのは、我々は、この3ヶ月やってきたこと以外の術を持たなかったということだ。すぐに翌週が来てしまう毎週毎週の講義のサポートをする中で、学生と話し合いながら、補講を担当した我々教員は何が合理的配慮なのかを現場で協働的に判断し、実践するという以外、選択肢はなかった。一旦学期が始まってしまうと、立ち止まって何が合理的配慮として相応しいのかといった議論はもちろん、科目ごとの進捗を学部内で確認したりする機会も持つことは難しかった。我々も、誰かに相談したくても、何が問題になっているのか明確に分からなかったり、誰に相談して良いのか分からないこともあった。学生と話し合うこと、学部担当教員と補講担当教員が話し合うことで、毎週目の前に現れる新しい問題をその時その時、一緒に解決していくほかに、余裕も知識も方法も持ち合わせていなかった。合理的配慮は、配慮を必要とする学生の意思表示があった場合に社会的障壁を除去すること（独立行

政法人日本学生支援機構編2018)とあるが、大学という新しい初めての環境の中で、多人数の年上の教職員などの関係者、同級生たち、先輩たちという新しい人間関係を築く初期の段階で、学生が意思表示をする難しさは想像に難くない。週を重ねるごとに信頼関係を築く中でコミュニケーションの質も高まったと言える。つまり合理的配慮とは、授業の当事者たちの外側にある定義ではなく、その場で学生が必要とする内容に向き合い、コミュニケーションを取りながら作る協働作業なのではないかを感じる。特にこういった対応に未経験の教員たちが全てを抱え込み、相談相手を持たずに行うことは、学生の不利益になりかねない。大切なのは情報共有しながらその都度判断できる組織的ネットワーク体制なのではないかと思う。

3ヶ月経った今なら、何に配慮すべきなのかぼんやりと分かってきたことはある。しかし、それはここまでの積み重ねがあつてこそその理解形成であり、その時その時に自分たちで判断し実践したことから学んだ経験が土台となっている。同時に、学生本人の基礎知識と努力、そして前向きな姿勢に頼っている部分も少なくない。学生自身も大学での英語教育に対する予想や期待があつたかもしれないが、何をどれだけ求められるのかは、他の学生以上に講義が始まらないと分からなかっただろう。我々は該当学生と一緒に、毎回の講義とそれに続く補講の中でその都度様々な学びの方法論も模索してきたが、今後もコミュニケーションを密に取ることで、課題を一緒に解決していきたいと考える。前述の通り、英語科目に関しては関係者が多く、情報共有が1つの課題となっている。非常勤講師の教員らとは、毎学期ごとに「ビジネス英語に関わるワークショップ」を開催し情報共有をしているが、2024年度前期におけるワークショップでは、視覚障がい学生への合理的配慮に関する項目をアジェンダに入れ、出来る

だけ学生にとっても、教員にとっても負担の少ない効率的で質の高い授業が可能となるよう努めたい。

【謝辞】英語科目の合理的配慮を考え実施するにあたり、現在進行形で関係者の皆さまには大変お世話になっております。筑波大学附属視覚特別支援学校の高村先生をはじめとする皆さま、宮崎大学生協の山本店長をはじめとする皆さま、都城点字図書館の皆さま、本学附属図書館の皆さま、障がい学生支援室の楠元先生、教養教育の皆さま、本学部の小垂葉係長をはじめとする教務学生支援系の皆さま、総務係の皆さま、309室の深田様、黒木先生、皆さまのお力添えがなければ、英語科目は成立しませんでした。厚く御礼申し上げます。同時に視覚障がい学生の、毎回果てしなく感じる語学習得に向けての努力に敬意を表します。そして最後に学部教員として、補講を担当して下さっている市園先生に、心からの感謝の意を表します。

#### —— 注 ——

- 1)訪問した学部教員は、英語科目を教える立場にいないため、1年次の授業内容は、事前に教養教育英語担当者から聞き取りをした内容である。
- 2)教科書の点字化については、本学の障がい学生支援室や、大学の附属図書館、生協の書籍部門などが、外部組織である宮崎県内にある都城点字図書館、宮崎県視覚障がい者センター、国会図書館、サピエ図書館と連携して下さり、入手が可能になっている。サピエ図書館には、既にデータ化された書籍リストがあり、助けられた（データ化がされていない書籍については、テキストデータの入手が必要になるため著作権の問題から出版社からの許可がいる）。データが入手出来ると、外部組織に点字印刷を依頼し、紙代を支払うシステムである。しかし紙媒体での入手はサピエ図書館の会員登録が必要となることから、大学生協の助言により本件では会員である都城点字図書館に依頼することになったが、その依頼は本学の障がい学生支援室が行い、またその紙代に関わる予算についても大学との交渉を担って下さった。例えば、TOEIC®テスト公式問題集1冊の点字版はおよそ19冊になり、かかる紙代は約1万円である。
- 3)TOEIC®テスト公式問題集に関しては、後日サピエ図書館において2冊データ化されていることが分かり、それらVol.(3)を2年次の、vol.(7)

を3年次のビジネス英語IおよびIIの教科書に指定することとした。これは、前年度からの教科書の変更を意味するため、継続的に同科目を担当している教員にとって新たに準備が必要となる。教科書の点字化は切実な問題であるため、学部教員から担当を予定している非常勤講師へこの変更に関して説明および依頼を行い、承諾を得ている。

#### —— 参考文献 ——

- 角山 照彦, LiveABC editors (2022) 『Live Escalate Book 3: Summit』成美堂。
- サピエ図書館 <https://library.sapie.or.jp/cgi-bin/CN1MN1/> (2024年6月27日取得)
- 筑波大学附属視覚特別支援学校ホームページ [https://www.nsfb.tsukuba.ac.jp/eigo/eigo\\_d.html/](https://www.nsfb.tsukuba.ac.jp/eigo/eigo_d.html/) (2024年6月27日取得)
- 独立行政法人日本学生支援機構編 (2018) 「合理的配慮ハンドブック ～障害のある学生を支援する教職員のために～」Web版 [https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu\\_shien/shogai\\_infomation/handbook/index.html/](https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/shogai_infomation/handbook/index.html/) (2024年6月27日取得)
- 文部科学省 (2015) 「文部科学省所管事業分野における障害を理由とする差別の解消の推進に関する対応指針について (通知)」 [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/gakuseishien/1382208.html/](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/gakuseishien/1382208.html/) (2024年6月27日取得)